

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】油井美春

【所属】(助成決定時)

神戸大学大学院国際文化学研究科

【研究題目】

インドにおける紛争予防—警察と地域の協働による防犯活動の実証分析—

【研究の目的】

本研究は、インド国内のヒンドゥー・ムスリム間のエスニック紛争を予防の視点から捉え直すものである。参与観察と聞き取り調査を通じて、自治体警察と地域住民が協働する予防活動の実証と、その理論的考察として非国家アクターを主体とした新たな安全保障研究による論証を行う。本研究の目的は、マハーラーシュトラ州ビワンディー市およびムンバイー市で活動を行ってきたモハーラー・コミッティへの実証を通じて、1) インドのヒンドゥー・ムスリム間のエスニック紛争予防活動はどのように遂行されてきたのか、2) 国家アクターである自治体警察と非国家アクターである住民が協働した紛争予防活動は、従来の安全保障研究の枠組みを乗り越えて議論することは可能か、の2点を明らかにすることである。本研究は、インドのヒンドゥー・ムスリム間のエスニック紛争研究に、予防の視点を取り入れ、参与観察と聞き取り調査によって予防活動の仕組みを分析することで、エスニック紛争予防のモデル化を行う。

【研究の内容・方法】

(1) 研究の内容

ヒンドゥー・ムスリム間のエスニック紛争については、歴史、社会、政治などに発生メカニズムを求める研究が多く行われてきたものの、その予防に関する具体的検証は希少である。本研究はエスニック紛争予防活動に関与したアクターとシステムについての分析を目的とし、1990年代以降マハーラーシュトラ州のビワンディー市およびムンバイー市で遂行されてきたモハーラー・コミッティの機能および実践をフィールド調査により検証する。自治体警察と地域住民によって行われてきたモハーラー・コミッティの活動は、エスニック紛争を予防し、地域住民と市警察の協力関係を促進することを目的とし、実際にその活動以来、2地域では紛争が発生してこなかった。

(2) 研究の方法

①フィールド調査: 2010年3~4月および2011年1~3月にかけて、ビワンディー市、ムンバイー市における参与観察とインタビュー調査を実施した。インタビューにおける質問項目は、対象者から見解、貢献意欲、動機、契機、手法、紛争予防の効果、目標の共有、問題点をそれぞれ導き出すことを意図したものであり、合計45名に対して行った。実施に際しては、対象者の所属する宗教コミュニティに偏りが生じないように注意し、モハーラー・コミッティに関する現地での聞き取り調査自体が、インド国内外においても未だに希少である状況から、学術上有用なデータを得たと考える。

②資料の収集と分析: 2010年10月~2011年10月まで、エスニック紛争、インド内政、自治体警察、そしてモハーラー・コミッティに関する新聞、雑誌、年次報告書、政府刊行資料などを対象として行った。

③研究書の収集と分析:理論枠組みにおいてエスニック紛争、コミュニティ・ポリシングに関する先行研究を、そして事例に関する検討のため、具体的な紛争、紛争に関与したアクター、自治体警察による紛争対応、モハーラ・コミッティの活動について行った。

【結論・考察】

本研究では2地域のモハーラ・コミッティによる紛争予防活動を分析してきた。第1に、ビワンディー市のモハーラ・コミッティは1990年代後半以降、市警察がその機能を軽視したことから弱体化し、2006年7月に市警察とムスリム住民間で発生した衝突事件が発生、紛争予防活動を遂行する難しさを提起できる。第2に、ムンバイ市のモハーラ・コミッティ・ムーブメント・トラスト(MCMT)は、退職した元市警察長官、地域住民を中核として、地域における紛争発生誘因を解消するため、社会活動や福祉的活動を行っていた。ムンバイ市では、1995年から2002年までの間に、度々紛争再発が懸念されたものの、MCMTの対話を手法とした実践によって、予防活動が遂行されていた。

本研究は、自治体警察が地域住民に対して、上意下達型もしくは問題解決型のアプローチを用いて、重要なアクターとして機能し、エスニック紛争予防活動を展開してきたことを明らかにする。